

マーケット概況（2019年9月）

9月の債券相場は、日銀オペで超長期ゾーンの買入額が減額されたことなどから売り先行で始まったが、世界的な金融緩和期待から欧米金利が低下した流れを受け、4日には10年355回債の利回りは-0.295%まで低下し、超長期ゾーンの各新発債の利回りも2016年7月以来の水準まで低下した。しかし、6日に黒田日銀総裁が超長期ゾーンの金利低下を牽制する発言を行ったことや、米中貿易摩擦の懸念が後退したことを受けてイールドカーブがスティーピングに転じると、その後は日経平均株価が22,000円台を回復したことなどから一段安となり、債券先物12月限は153円62銭まで下落し、10年355回債の利回りは-0.150%まで上昇した。19日の日銀金融政策決定会合では、経済・物価動向を次回会合時に再点検するとの内容が盛り込まれたことから中長期ゾーンを中心に金利低下が進み、25日には5年140回債の利回りが-0.400%、債券先物12月限が155円48銭と、いずれも最高値を更新した。一方、同日に実施された40年債入札が低調な結果となったことで超長期ゾーン主体に弱含みとなり、イールドカーブには再びスティーピング圧力が強まった。月末にかけては、26日の日銀オペで長期ゾーンの買入額が2回連続の減額となり、10月の運営方針も買入額の減額を概ね踏襲する内容となったことから債券相場は売り優勢の地合いとなり、10年355回債の利回りは-0.215%で月内の取引を終えた。

<短国市場>

月中旬まで-0.1%台中央で推移していた3Mは月末に1月償還入りすると-0.3%台後半に低下した。6日の3M855回債入札は最高落札利回りが-0.15%台と前回債から上昇し、13日の3M857回債入札は在庫余剰感から-0.12%台に上昇した。20日の3M859回債入札は-0.13%台だったが、来年1月償還となる27日の3M860回債の入札は海外投資家中心の需要により-0.25%台と堅調な結果となり、セカンダリー市場ではさらに金利低下し-0.390%で取引を終えた。一方、6M・1Yゾーンは月を通して堅調に推移した。6日の黒田日銀総裁によるマイナス金利深掘りを容認する発言を受けて9日の6M856回債入札は最高落札利回りが-0.26%台と前回債から大幅に金利低下した。また、19日の日銀金融政策決定会合で次回会合での追加緩和に前向きな姿勢が示されたことから6Mも買い進まれ、最終的に-0.315%で月内の取引を終えた。

<一般債市場>

10年政保債は3か月連続の下限利率0.001%に対し、10年地方債は前月比1.0bp低下し利率0.05%で起債された。条件決定前日の国債金利は-0.280%と前月の-0.135%から15bp程度低下していたため、政保債・地方債のプラス金利が選好され販売は順調だった。5年地方債は2016年12月以来となる下限利率0.001%に低下したが、引き続き旺盛な需要を集めた。社債は低金利環境の下、ソフトバンクグループ債、日本製鉄劣後債などの大型案件が相次ぎ、発行額は月次ベースで過去最高となる2兆7,170億円に膨らんだが、より高い利回りを求めて投資家の資金が流入し需給が大きく崩れることはなかった。

◎ 主要債券月間四本値 ◎

銘柄	始値	高値	安値	最終出来値
#355	-0.275(2日)	-0.295(4日)	-0.150(18日)	-0.215(30日)
#354	-0.280(2日)	-0.310(4日)	-0.170(17日)	-0.240(30日)
#345	-0.380(2日)	-0.390(4日)	-0.265(13日)	-0.365(30日)
#140(5Y)	-0.350(2日)	-0.400(25日)	-0.255(13日)	-0.355(30日)
#169(20Y)	0.045(2日)	0.015(4日)	0.220(18日)	0.195(30日)
#856TDB(6M)	-0.300(9日)	-0.315(9日)	-0.273(11日)	-0.315(30日)
#854-#860TDB(3M)	-0.160(2日)	-0.390(30日)	-0.130(13日)	-0.390(30日)